「歩行者優先」のまち宣言

私たちは、交通事故のない安全で安心なまちをつくるため、一般道路や歩道、横断歩道において、「歩行者優先」の原則を徹底します。

自動車および自転車等を運転するときは、高齢者や児童・生徒などの歩行者が、安全に道路を通行できるよう配慮します。

ここに、町民、事業所、行政が一丸となって、交通事故のない阿久比町を目指し、「歩行者優先」のまちを宣言する。

阿久比町交通安全推進協議会会長
阿久比町長　竹内啓二

● スピード調査の実施

ドライバー、歩行者双方が交通安全に対する意識を高め交通事故を無くすことを目的として町内の主要道路で、町職員による自動車のスピード調査を定期的に行っています。結果を広報誌やホームページで公表することで、ドライバーの皆さんには安全運転を呼びかけ、歩行者の皆さんには速度超過で走行する車が多いことを認識して道路の横断に十分気をつけてもらうなど、安全運転や交通事故防止を啓発しています。

スピード調査の様子

● 社会福祉の充実

終戦後、生活困窮者を対象とする経済的援助活動として、社会福祉事業が各地で進められました。本町の社会福祉事業は、昭和22年の「国民助け合い共同募金運動」への参加から始まり、昭和60年に発足した阿久比町社会福祉協議会を中心に、生活保障にとどまらず、各方面にわたって社会福祉の充実を進めています。また、民生委員・児童委員の地域での活動は社会福祉増進のために特に重要な役割を果たしています。

近年、住民を取り巻く社会環境は大きく変化しており、地域の住民が互いに支えあう基盤の整備や福祉相談員「コミュニティソーシャルワーカー」の配置といった地域福祉活動の推進に取り組むとともに、各種相談窓口の開設や各種医療費助成、手当の支給のほか、タクシー料金助成制度など公的サービスの充実を図っています。

● もちの木園

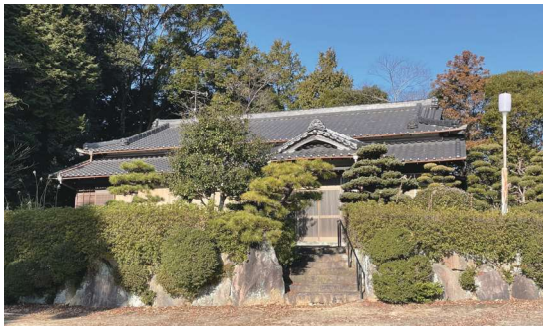
町立もちの木園は、昭和57年に旧草木保育園舎を利用して、心身障害者小規模授産所として開設され、平成3年に現在の場所に移転しました。平成18年から指定管理者制度が始まり、民間の事業者が管理運営しています。利用者が住み慣れた地域の中で、自分らしく自立した日常生活や社会生活を送れるよう、働くことを通じた知識や能力向上のための訓練をはじめ、日常生活や創作的活動などの支援を行っています。

もちの木園

● 老人憩の家

高齢者福祉施設として、本町に最初に完成したのは「阿久比老人憩の家」です。老人憩の家は、高齢者に対して教養の向上とレクリエーションなどのための場として造られた施設であり、心身の健康増進を図るためのものです。

現在、阿久比、福住、高岡、萩、卯之山、宮津団地、草木の７つの老人憩の家があります。



阿久比老人憩の家

● 地域包括支援センター

平成19年１月１日から阿久比町地域包括支援センターを設置しています。地域包括支援センターでは保健師、主任介護支援専門員、社会福祉士などの専門職が連携して業務に取り組んでいます。地域包括支援センターの主な業務として、高齢者に関するさまざまな相談を受け付ける「総合相談支援」、介護予防を目的とする介護サービス利用計画（ケアプラン）の作成を行う「介護予防ケアマネジメント」、高齢者の権利や安全を守る「権利擁護」、関係機関との調整や、介護に携わる方を支援する「包括的・継続的ケアマネジメント」の４つが挙げられます。

地域包括支援センター

● 幼稚園と保育園とこども園

本町には町立の幼稚園が１園と保育園が４園、私立の保育園が４園と幼保連携型認定こども園が１園あります。ほくぶ幼稚園は町内で唯一の幼稚園で、昭和50年に創立し、平成12年に現在の園舎に移転しました。平成25年に新たに町立英比保育園の開園に伴い、英保育園と北原保育園を休園しました。平成28年には、ひなた保育園（私立）が、平成29年にSAKURA保育園（私立）が新たに開園し、令和２年には南部保育園が阿久比町で初の幼保連携型認定こども園「いしざかやまこどもえん」として開園しました。

幼稚園・保育園・認定こども園一覧

区分	園名	所在地
町立	ほくぶ幼稚園	阿久比町大字卯坂字西谷63番地
町立	英比保育園	阿久比町大字卯坂字大平18番地
町立	草木保育園	阿久比町大字草木字平井林１番地３
町立	宮津保育園	阿久比町陽なたの丘一丁目９番地
町立	城山保育園	阿久比町大字卯坂字栗之木谷５番地
私立	東部保育園	阿久比町大字宮津字宮本26番地１
私立	中部保育園	阿久比町大字椋岡字長光寺25番地
私立	ひなた保育園	阿久比町大字福住字南池177番地６
私立	SAKURA保育園	阿久比町大字福住字井堀49番地
私立	いしざかやまこどもえん	阿久比町大字植大字石坂37番地

● 卯ノ山児童館

卯ノ山児童館は、昭和51年に児童に健全な遊びを与え、個別的および集団的に指導して児童の健康を増進し、情操を豊かにする目的で造られました。また、親子遊び方教室の開催などいろいろな活動を行うことで、児童の健全育成の役割を果たしています。

卯ノ山児童館イベント

第６節　商工農業・交通

● 商業の移り変わり

阿久比川が町の中央を流れているため、集落はその周辺の丘陵地に造られ分散しています。そのため、阿久比町には中心となる商業地がありませんでした。昭和 44 年に富士製鉄団地（現在の宮津団地）が完成し、名古屋市のベッドタウンとして、福住園高台、白沢台、高根台などが開発されたほか、近年では東部学区の大規模住宅地開発（陽なたの丘）により人口が増えるにつれて、幹線道路沿いに大型店やコンビニエンスストアなどが進出し、徐々に商業地が形成されています。平成 11 年に都築紡績植大工場跡地に大型商業施設が完成、翌平成 12 年に複合映画館が完成し、町内外から多くの人が訪れています。平成 30 年には知多半島道路阿久比パーキングエリア（下り）がリニューアルオープンし、活気をもたらしています。

大型商業施設

阿久比パーキングエリア（下り）・大地の種

● 工業の移り変わり

知多半島は古くから繊維工業が盛んに行われていました。本町にも、住宅地の中に町工場が数多く見られ、ガチャガチャと綿布を織る音が響いていました。これらの織布工場は昭和 30 年代前半までの「ガチャマン景気時代」に造られた工場が多く、オイルショック後の昭和 50 年ごろには 77 の工場がありました。しかし、平成元年には繊維関係の工場数は 39 に減り、工業統計調査によると、令和 2 年には繊維関係の会社は 5 社となっています。

都築紡績植大工場

都築紡績は、明治 41 年に都築吉太郎によって織機 50 台で「マルツ織布」として始められました。その後 6 男の良平が家業を継ぎ、昭和 23 年に社名を「都築紡績」に改名して本格的な紡績工場となりました。その後、海外進出を始め、娯楽施設・ホテル・飲食店など経営の多角化を進めていきました。繊維業界の衰退に伴い、工場は閉鎖となり、都築紡績植大工場の跡地には大型商業施設と複合映画館が立ち並んでいます。

㈱デンソー阿久比製作所

平成 2 年 4 月、草木地区に誘致された日本電装㈱阿久比製作所（現在の㈱デンソー阿久比製作所）が開業しました。町内には㈱デンソー阿久比製作所のある草木工業団地、草木東部工業団地、中部工業団地、南部工業団地の 4 つの工業団地があり、さまざまな分野のものづくりの拠点となっています。

中部工業団地

● 愛知用水の完成と農業の移り変わり

阿久比町は「阿久比九十九谷」といわれるように、たくさんの谷がみられ、阿久比川支流の谷が丘陵の奥深くまで入り込んで、数多くのため池がありました。知多半島は、山が低く川が短いため丘陵の水持ちが悪く、年間の降水量も少ないため、農家は、毎年のように干害に苦しめられていました。そこで、人々は丘陵の谷間にため池を造り、小さな水路を引いて田畑の引き水をしてきましたが、十分な水を得ることはできず、昔から水の争いが絶えませんでした。

昭和 22 年、知多半島を襲った干害は、農家に大きな被害を与え食糧不足を引き起こし、用水開発への願いを強く持つようになりました。

昭和 24 年 9 月、「愛知用水開発期成同盟会」が知多郡八幡町の久野庄太郎と農業学校教諭の濱島辰雄を中心として発足し、夢の実現に向けて動き出しました。その後、用水開発は国家事業となり、事業資金の一部を世界銀行から融資を受け、昭和 30 年 10 月には「愛知用水公団」が設立し、工事が開始されました。

阿久比川西部を流れる愛知用水

工事は新しい大型機械とアメリカ人技師の活躍で、わずか 5 年で終わり、昭和 36 年 9 月、人々が待ち望んだ夢の用水が完成し木曽川の水を知多半島の農業用水、工業用水、上水道へと供給し始めました。このことにより、特に知多半島の農業が一変していきました。この用水によって、丘陵地の田畑に、豊富な水を供給することができるようになり、丘の上に水田が造られたり、果樹栽培やハウス栽培などが行われたりするようになりました。いつでも豊富に水が得られることから、ほ場整備が盛んに行われるようになり、新しい農業を目指す動きや農業の機械化が進みました。愛知用水の通水により、阿久比の農業は大きく変わるとともに、ため池が埋め立てられるなど、土地景観にも大きな変化が生まれました。

● 道路の整備

愛知用水の完成と同じように、昭和 45 年に、知多半島を大きく変える出来事がありました。それは、知多半島道路の開通です。知多半島の中央を縦貫するこの道路は、知多半島道路、南知多道路で構成された「知多中央道」とも呼ばれていました。阿久比インターから名古屋中心部までは車で約 30 分、平成 17 年に中部国際空港（セントレア）が開港すると、空港まで車で約 20 分でアクセスでき、交通の利便性が飛躍的に向上しました。

知多半島道路

また、県道西尾知多線の 4 車線化により、東西の交通が円滑になり、三河への時間が短縮されました。これらの道路整備により名古屋と三河を結び、まちの発展につながっています。

阿久比インターが造られる前は、坂部地区から草木地区に入っていくと、西尾知多線の北側は田が広がり、南は山林で覆われていました。民家は少なく山に囲まれた自然豊かな土地でした。名古屋方面へ通勤する車が知多半島道路を利用するため阿久比インターに集まり、県道西尾知多線の交通量が増えました。また、時間的に名古屋に近くなったことから、土地区画整理事業が進み住宅地が広がりました。

昭和 52 年に県道草木金沢線が 2 車線の舗装道路に整備され、昭和 53 年に多賀神社前から植大までの農免道路が開通すると、ますます交通量は増え、草木地区の様子を変えていきました。

県道名古屋半田線は本町の大動脈で、この道を通って名古屋や半田に出かけていました。しかし、交通量の増加に伴い、朝夕は交通ラッシュによる渋滞が問題となり渋滞を少しでも緩和するため、県道名古屋半田線のバイパスとして高根台から阿久比団地の西を通り、宮津・横松を抜けて半田橋に至る都市計画道路名古屋半田線が計画され、現在も進められています。

東部小学校付近
（都市計画道路名古屋半田線）

● オアシス大橋の開通

阿久比町は、町の中心部の南北を阿久比川が流れているため、東と西の交流がしにくく、東西を結ぶ橋の完成が待たれていました。町民の願いが現実のものとなったのがオアシス大橋です。

平成元年 11 月 3 日、三笠宮寛仁親王ご夫妻をお迎えして、盛大にオアシス大橋の開通式を行いました。

オアシス大橋開通式

● 名鉄阿久比駅の新設と循環バスの運行開始

名鉄河和線は、県道名古屋半田線と平行して、町内を南北に走っています。町内には白沢・坂部・椋岡（平成 18 年に廃止）・植大の 4 つの駅がありましたが、このうち急行の停車駅が坂部駅でした。昭和 58 年、阿久比の玄関口として急行の停車する阿久比駅が新設されました。また、平成 20 年に阿久比駅は特急停車駅となり、特急を利用すれば名古屋中心部まで 27 分でアクセスできるようになりました。平成 27 年にはバリアフリー化工事により、エレベーターが完備され、高齢の方や障がいのある方、ベビーカーを利用する方なども安全で安心して利用できるようになりました。阿久比町の玄関口として、幅広い方々に利用されています。

町の公共交通機関としては、阿久比町循環バス「アグピー号」があります。平成 23 年に試行運転が始まり、平成 24 年に愛称を募集し、審査の結果「アグピー号」に決まりました。平成 26 年 10 月 1 日に本格運行の出発式をエスペランス丸山で行い、町民にとって貴重な公共交通機関として新たな一歩をスタートしました。全区間無料で運行し、買い物や通院など町民の皆さんの生活の足として利用されています。

阿久比駅開業

名鉄阿久比駅

アグピー号出発式

第７節　教育

● 敗戦直後の教育

新しい教育が始まったころは、戦後間もないころで国中が貧しい時代でした。そんな困難な時代であっても、どこの家庭も子どもたちの教育にはとても熱心でした。

連合軍の占領下、軍国主義の一掃が推し進められ、学校では戦時中の教科書の黒塗りが行われました。こうした戦後の混乱の中にありながらも、新教育「6･3 制」が昭和 22 年４月１日に産声をあげました。本町においても「国民学校」から「小学校」へと校名を改めて、一斉に開校しました。

中学校は、「阿久比中学校」として開校し、４月 18 日に入学式はしたものの校舎はなく、４つの小学校校舎での仮住まいという状態でした。

● 再出発期の小学校教育

新学制となり、それまでの国民学校初等科、高等科がなくなり阿久比村立第一・第二・第三・第四小学校と呼び、翌年の昭和 23 年から、東部小学校・英比小学校・草木小学校・南部小学校と学校名を変えました。

教育改革の一つに、各学校における「父母と教師の会（PTA)」の結成があります。どの小学校も、昭和 22 年から 23 年にかけて PTA が結成されて、現在に至っています。当時は、戦争によって食糧事情や経済状況も悪く、社会環境は不安定でした。そのころの町内の学校の状況は、程度の差はあるものの物不足ということもあり、いろいろな教材が不足していました。そのため､PTA は教育のあり方を考えるだけでなく、資金調達や奉仕作業によって教育設備の補充にも努力しました。

英比小学校正門

1951 年（昭和 26 年）植大出身の都築良平氏からの寄付を頂き、それに村費 1,000 万円を追加して、合計 1,500 万円で、４小学校の体育館を新設しました。

戦後の食糧不足は全国的にひどいもので、学校では、ユニセフ（現国際連合児童基金）の援助による脱脂粉乳のユニセフ給食が始まり、しばらくして、野菜などを持ち寄って給食が始まりました。終戦直後の児童の栄養状態はかなり救われたものと思われます。

南部小学校旧体育館

昭和 27 年に「学校給食法」が制定され、完全給食の実施率も高まり、給食が現在のように行われるようになりました。

● 戦後教育の移り変わり

終戦後、昭和 22 年に学校教育法が制定され、6・3・3 制の学校制度へ転換し、義務教育が９年間となりました。また、昭和 26 年から教科書の無償給与が部分的に開始され、昭和 44 年に小中学校の全学年教科書無償給与制度が完成しました。バブル景気を終えたころ、平成４年から毎月第２土曜日が休業日となり、平成７年から月２回実施、平成 14 年から完全学校週５日制が実施されました。平成 22 年から高等学校等就学支援金制度が始まり公立高校の学費が実質無償化、令和２年から私立高校の授業料も実質無償となりました。

● 阿久比中学校の発足

昭和 22 年 4 月 1 日に男女共学の阿久比中学校が創立されました。本校は現中央公民館の場所におかれ、校舎は町内の 4 つの小学校を分教場とする変則的なスタートであり、教職員も少なく教科担任制をとることもできませんでした。昭和 23 年に新校舎の建設が現在の丸山公園の地で始まり、全校生徒が手伝いをし、村民たちも勤労奉仕作業に参加しました。昭和 24 年 3 月、待望の新校舎の第 1 期工事が完了しました。

旧阿久比中学校校舎全景

昭和 45 年 5 月 14 日、阿久比中学校の校舎移転が決まり、卯坂字半田ケ峰 1 番地で校地の造成を始めました。昭和 46 年には鉄筋コンクリート 3 階建の新しい校舎が完成しました。

新校舎への移動は PTA の協力を得て 3 日間にわたって行われました。大変な作業は、PTA が担当したメタセコイアの移植と生徒の机や椅子を運ぶことでした。移転後も水道や電気が仮設状態のままで授業が行われました。

阿久比中学校

その後、阿久比中学校は生徒数の増加に伴い校舎の増築を重ねて、最大 32 学級（昭和 62 年度）というマンモス中学校になりました。

令和 4 年度には、大規模住宅地開発（陽なたの丘）による生徒数の増加に対応するため、普通教室 10 クラスの校舎を増築します。

● 愛知県立阿久比高等学校

愛知県立阿久比高等学校は、昭和54年に開校し、平成30年度に創立40周年を迎えた普通科高校です。校訓「剛・知・仁」のもと、「知・徳・体のバランスの取れた人間の育成」を目指した活発な教育活動が展開されています。

平成 17 年度に国際コミュニケーションコースが設置され、グローバル社会に対応し活躍できる人材の育成が行われています。水泳訓練やオリエンテーリング大会などの特色ある体育的行事やボランティア活動が盛んに行われるなど、生徒と教員が力を合わせ生き生きとした教育活動が行われています。

阿久比高等学校

● 児童数の急増期

昭和 36 年度の英比小学校の校舎改築をきっかけとして、それぞれの学校の校舎は続々と新・改築されました。

東部小学校増築校舎

団地開発が相次ぎ、東部学区では、昭和 44 年に宮津団地、昭和 46 年に宮津山田団地の大規模な開発が進みました。そのため東部小学校では、児童数の急増に校舎の建設が間に合わず、プレハブ校舎で急場をしのいだこともありました。この時期を境に木造校舎は姿を消し、近代的な鉄筋校舎へ生まれかわりました。英比学区では、阿久比団地や日生白沢団地の開発が早く、福住園高台・白沢台・高根台などの団地の開発も行われました。そのため、最高児童数は昭和 59 年度に 1,147 人になりました。

東部学区の大規模住宅地開発（陽なたの丘）により、平成 22 年から人口は大幅に増加しました。東部小学校区在住の児童数の急増に対応するため、平成 27 年と令和 2 年に東部小学校の校舎を増築しました。併せて令和 2 年度から学校間における児童・学級数の不均衡を解消し、子どもたちがより良い環境で学校生活が送れるように東部小学校と英比小学校の学校選択制を導入しました。

● 阿久比町幼保小中一貫教育プロジェクト

幼保小中一貫教育プロジェクト

阿久比町には幼稚園１園と保育園８園とこども園１園、そして小学校４校と中学校１校があり、小学校を卒業するとほぼ全員が町の中心部にある阿久比中学校に進学していきます。とてもまとまりのある地の利を生かし、健やかな阿久比の子どもに育ってほしいという地域の方からの思いに支えられ、平成 17 年度に幼保小中一貫教育プロジェクトがスタートしました。

その際、打ち出されたのが「欠落なき教育」「段差なき教育」「落差なき教育」という理念です。15 年間で阿久比の子どもを育てるという共通認識のもと、年齢間・学校間・校種間の格差をできるだけなくし、意味のないストレスを子どもたちに加えない工夫を凝らしながらさまざまな取り組みが行われています。

● 放課後児童クラブ

放課後児童クラブ

保護者が労働などにより昼間家庭にいない小学生に対して、放課後や夏休みなどに適切な遊びや生活の場を提供し、児童の健全な育成を図ることを目的として、平成 14 年４月１日に南部学区に初めて放課後児童クラブを開設しました。平成 19 年に４学区すべてに整い、現在「げんきッズ南部」「げんきッズ英比」「げんきッズ東部」「げんきッズあゆみ」「げんきッズ草木」が開所され、長期休暇のみの「長期休暇限定児童クラブ」も開所されています。

● 子ども総合支援センターの開設

子育て支援センター（あぐぴっぴ）

平成 20 年にスポーツ村に開設した「子ども総合支援センター」は０歳児から中学３年生までの子育て・教育の支援の場として子どもや保護者の相談に応じています。子ども総合支援センターには「子育て支援センター（あぐぴっぴ）」と「教育相談センター」があり、子育て支援センターでは、子育ての相談やさまざまな講座の開催、一時的に子育てを助け合う有償ボランティアのファミリー・サポート・センターの開設などを行っています。また、教育相談センターでは学習・友達関係・いじめ・不登校などの学校教育や発達相談、家族への接し方（虐待を含む）など家庭教育に関して相談員が対応しています。

● 新学校給食センターの完成

新学校給食センター

給食センターの老朽化に伴い、新学校給食センターが令和２年８月に完成しました。

町立の小学校・中学校・幼稚園・保育園に通っている子どもたちから、新学校給食センターの愛称を募集し、新学校給食センターの愛称は「AGUMOGU（あぐもぐ）」に決定しました。新学校給食センターは最新の衛生管理基準に対応し、以前の給食センターよりもさらに衛生的で安全においしい給食を提供できる施設となっています。また、食物アレルギーに対応できる専用の調理室を設置するほか、特定原材料 28

品目（食物アレルギー）に対応した非常食4,500食分を常備しています。

以前の給食センターで好評だった見学通路を引き継ぎ、調理作業場ごとの部屋を2階の窓から見学できるようにしました。また、調理釜を展示し、実際の調理道具を使っての「混ぜる」「配食する」など調理体験ができるゾーンも用意しました。

調理風景

● GIGAスクール構想の実践

令和2年度から全小中学校の児童・生徒1人1台のパソコン（タブレット）と通信ネットワークを一体的に整備し、ICT教育を導入しています。学習環境を充実させるとともに、Society5.0時代を生きる子どもたちが豊かな創造性を備え、持続可能な社会の形成に参画するための資質や能力を育みます。

タブレットを利用した授業

● オアシス運動

阿久比中学校生徒会が、昭和54年度前期の活動として取り組んだ「おはよう・ありがとう・しんせつに・すみません」の気持ちを育てる「オアシス運動」は、まち全体の取り組みへと発展しました。

平成15年に制定した阿久比町民憲章にもオアシス運動の一文が掲げられています。現在は各種行事や会議の際に町民憲章を唱和し、まち全体でオアシス運動を進めています。

● 幼保小中高一斉あいさつ運動

あいさつをする習慣を付け、人との関わりを大切にする気持ちを育てるため、平成19年から「幼保小中高一斉あいさつ運動」を実施しています。保護者や地域の協力をいただき、まち全体で取り組んでいます。うちわやのぼりを使ったり、青色防犯パトロールカーで巡回など各園・各校で実施方法を工夫しています。子どもたちがいつでもどこでもあいさつができる環境を整えています。

幼保小中高一斉あいさつ運動

● 菊づくり運動

昭和54年から菊づくり運動が始まり、昭和62年には国土庁監修「全国市町村なんでも日本一事典」で、住民参加型の菊花展では日本一と認められました。現在も菊愛好家を中心に菊づくりが行われています。

菊づくり運動

● 阿久比町凧あげ大会

毎年町内の4地区で開催される阿久比町凧あげ大会では、子どもたちが自ら作ったイラスト入りの凧や、地区で制作した大凧が空高く舞いあがります。大会後は、大空を舞った各地区の大凧がアグピアホールに集合する大凧展示会を開催しています。

阿久比町凧あげ大会